

〈第十七回銀華文学賞応募作品 奨励賞〉

毛虫のレラ

青木ガリアン

けたたましく鳴り響いた警告音は、海を隔てた隣国のミサイル発射を知らせる緊急警報だった。通過領域として早朝から大騒ぎとなった北海道も、学校が始まる頃には日常を取り戻していた。

空は変わりなく、どこまでも広がった。

小学校のグラウンドには、ドッジボールを応援する子どもたちの声が響いていた。朝晩は肌寒さが残るのに、もう半袖の子もいた。

——また、嫌な季節がやって来る。

上下ジャージに身を包んだ礼来^{レラ}は、飛んできたボールを両腕でしっかりと受け止めた。

礼来は人より毛深い。小学五年の女の子のどつて毛深さは深刻な悩みだ。北海道といっても、遅い春が終われば、薄着となり肌は外に出る。体を動かす体育の授業では尚更だ。

——ずっと寒いままでもいいのに。

礼来は力を込めてボールを投げ返した。

「レーちゃん、残り二人」

小さい体でボールから逃げ回っていた果歩が横に来た。果歩は舌足らずで、子どもの頃から、礼来を「レラ」と上手く言えない。

味方は礼来と果歩だけ、相手も男の子が二人となっていた。体育の授業の終わりに、男女混じって始めたドッジボールなのに、いつのまにか男子対女子の戦いとなり、周りの声援も大きくなっていった。

「危ない、果歩！」

果歩を目がけて低いボールが飛んできた。

果歩は飛び越えて逃げようとして体勢を崩した。礼来が手を差し出すと、果歩は一瞬怖がるように手を引つ込め、さらにバランスを崩し、尻もちをついた。果歩はすぐに立ち上がったが、そこを相手に狙われ、あっけなくアウトとなった。果歩は注目を浴びたのがうれしかったのか、笑顔でピースをしながら枠の外へ出た。

「やっぱりアホだな」

果歩を指差し、囁き合う声が聞こえた。

いよいよ、男子二人に、礼来一人となった。ボールは男子側のソジンの手にあった。

「狙え！ ソジン」

「ソジン、発射！」

ソジンは半年前に韓国から転校してきた。国が違うのに、ミサイルの警報が鳴り響く日には、悪意のある言葉がソジンに向けられる。ソジンは細かい日本語はわからないふりをしてるが、意味は理解しているのを隣の席の礼来は知っていた。

「礼来さん、負けないで！」

ソジンの名を呼ぶ応援に混じり、学級委員の田島さんの声が聞こえた。田島さんは勉強もできるし、顔が小さく、姿勢が鶴のように美しい。男の子はもちろん、女子にも田島さんのファンは多い。そんな田島さんが、礼来に声をかけるなんて珍しい。

「よし！」

礼来はジャージの両袖をまくり、腰を落とし身構えた。

ソジンがボールを上には振りかぶった。

——大丈夫、取れる。

そう思った瞬間、ボールは鈍い音をたて礼来の腕からこぼれ落ちた。

ボールが地面に転がるのを見て、美子先生がホイッスルを吹き、ゲームの勝敗はついた。同時に体育の授業も終わった。

「やった、ソジン、命中！」

「ソジン、全滅だ！」

男子たちは相変わらずソジンの名を連呼しふざけ合っていた。

礼来はジャージの袖を手の甲まで引っぱり、グラウンドから一人遅れて校舎に戻った。

校舎前の花壇にソジンがいた。今年は美子先生の提案で、みんなが嫌いな人参を育てることにになり、ソジンはその係とされていた。動物が好きな礼来はウサギの飼育係で、よくソジンから人参の間引き菜や抜いた雑草を餌としてもらっていた。

ソジンは礼来に気づくと、両手を顔の前で合わせ頭を下げた。ソジンは謝る時いつもそうする。

「レーちゃん。腕、大丈夫？ ソジンも思いつ切り投げるからなあ」

水飲み場にいた果歩が後を追いかけてきた。

ソジンは明らかに手加減していた。礼来が取れなかったのは違う理由だ。

腕をまくり身構えた時、遠くで礼来を指差す男の子が見えた。その口元は「け」「む」「し」と動いていた。礼来の身体は凍りついた。冬場はその言葉も隠れているのに、虫が活動し肌が出る季節になると、決まって陰で囁かれる。「毛虫の礼来」、その言葉を聞く度に礼来は自分の毛深さを呪った。

何も答えないまま玄関まで行くと、果歩は下駄箱から袋を取り出し、

「レーちゃん、着替えてもいい」と言った。

小学校には決まった体操服はなく、体育のある日は動きやすい服で来るので着替えは無い。それでもコロナや猛暑もあり、更衣室を利用し着替える子も多くなっていた。

すぐに教室に戻りたくなかった礼来は、黙って果歩について更衣室に行った。

ジャージを脱いだ果歩はまだ子どもの下着で、腕や足も赤ん坊のようにつるつるだった。

「ママが昔着ていた服を仕立て直してもらった」

果歩のママは菓子工場で働きながら洋裁の仕事もしている。果歩が持ってきた服は白地に黒の水玉柄で、礼来がけっして着ることのない半袖の涼し気なワンピースだった。

果歩はワンピースを頭からかぶり、袖に手も通すことなく、礼来の顔を真っ直ぐに見ていた。そのまじめな顔の下に、背中のファスナーがあった。

「アホか、服の前後ろ反対や」

礼来が漏らした「アホか」に、果歩はニヤリと笑うと、突然体を大きく揺らし、服の前後ろをぐるりと回した。そして、すっと両腕を出したかと思うと、片足をくの字に上げ、両方の手のひらを大きく広げ言った。

「アホちゃいまんねん、パーでんねん」

果歩は片足のまま、体を斜めにして礼来の顔を覗き込んだ。

「どう？ 昔、テレビのお笑い番組で流行ったギャグ。パパさんが教えてくれた」

二人の家には父親がいない。そのことで保育園時代から母親どうしも知り合いで、どちらかの母親が仕事で遅くなる時は、一緒にご飯を食べたりもした。最近でこそ、鬱陶しくて離れていることが多いが、小さい頃はよく手をつないで遊んでいた。

果歩は別れた父親と時々会っている。果歩が父親のことをパパさんと呼ぶのはママにもパパにも気を使った微妙な呼び方だ。果歩の父親は若い頃、芸人を目指していた。果歩のおかしな関西弁もその影響で、礼来の言葉も少しうつつある。飲食店で働いていたが、コロナで仕事がなくなり、会う機会も増えたらしい。

礼来は父親のことを何も知らない。死んだわけでも別れたわけでもなく、最初からいなかった。家には写真すらなかった。父親どころか、礼来は親戚すら会ったことがなかった。

「ふざけてないで早くして」

礼来は必死に笑いを押し殺していた。

「レーちゃん、笑ってるよね」

「ねっ」を繰り返し、果歩は礼来の顔を何度も覗き込んだ。

「アホか、全然おかしくない」

礼来は更衣室を出て、急いで教室に戻った。その後を果歩が慌てて走ってついてきた。

すでにチャイムが鳴り始めていた。

席につくと、美子先生もすぐに教室に入ってきて、日直の号令に合わせ、みんなが立ち上がった。

体を動かして暑かったのか、着替えた子もいれば、上に着ていた服を脱ぎ、椅子の背にかけている子もいた。上下ジャージで変わらないのは、礼来と美子先生ぐらいだった。美子先生のジャージ姿は格好良かった。美子先生は美人とは言えないが、その表情や動作は凛々しく、礼来は密かに憧れていた。

「礼、着席」

日直の声が聞え、椅子に座ろうとした時、礼来は自分に向けられているクラスの視線を感じた。横を見ると、ソジンが心配そうな顔で礼来を見ていた。ドッジボールのことならもういいのにと思いながら、教壇の美子先生に目を向けると、先生はチョークで黒板に大きく「環境」と字を書いた。

その字を見て、礼来は課題を忘れていたことに気づいた。

前の週に校外学習があった。四年の時は野菜の収穫体験やトンボと蝶の生態観察をしたが、今年は文化交流センターとサケの科学館に行き、アイヌの人たちがサケを余すことなく使い、自然を大切に生きてきたこと、そのサケが川に戻って来なくなり、再びサケが帰ってくるきれいな川にするために市民が努力してきたことを学んだ。

そして、帰りのバスの中で美子先生は、

「今日勉強したことを活かすために、自分の課題と思える環境問題を一つ見つけ、何が問題なのかを来週までにそれぞれ調べてきてください」と言っていた。

礼来は街に現れ出した熊の生態について調べようとして、そのままにしていた。まずいと思った時に、果歩が教室の一番前で手を上げた。

「先生、トイレに行ってきていいですか？」

教室は爆笑に包まれた。

「アホか、授業始まったばかりだ」

男の子の声が飛んだ。

しかし、美子先生はこれまでの先生とは違い、厳しく怒ったりもせず、「今度は休み時間に行っておくよ」と優しく注意して、すぐにトイレに行かせた。

走って教室を出ていく果歩を男子たちが「カホ」「カホ」と囃し立てた。

「静かに！」と美子先生は注意した。

美子先生は春に担任になったばかりでまだ気づいていないが、こういう時は「カホ」の名前に「アホ」をかぶせて、誰が言ったか、何を言ったかをわからないようにしてみんな

で一人を貶める。それがこのクラスのやり方だ。ソジンを別の国で当て擦るのも、予め言い逃れを考え、ぎりぎりのところを楽しんでいるのだ。礼来も昔、名前の漢字が学校前にある中華料理店「来来」と似ていることから、「中国人」「ラーメン屋」と囃し立てられたことがある。

——確かに果歩は人と違う。忘れ物も多いし、時間も守れない。何より、会話が噛み合わない。だからといって、みんなで「アホ」と言うのはひどすぎる。

礼来の耳の奥で、「アホ」と呼ぶ声が、「中国人」「ラーメン屋」に変わり、いつしか「毛虫」になっていった。

礼来は、机に両手をついて立ち上がった。

みんなの目が一斉に礼来に向けられた。

「先生……」

言えば、また自分が標的になる。そう思うと言葉は続かなかった。

「どうしたの？」

優しく聞いてくれた美子先生の顔が、礼来の瞳の中で小刻みに揺れていた。礼来は指先から震えが上がってくるのを感じていた。落ち着こうと、目を閉じ、息を大きく吸った。

そして、ゆっくり目を開けてみた。何か小さい黒いものが指にまとわりついていた。それはもぞもぞと動いていた。

「ビャー」

礼来は声を上げ、手を強く払った。

それは毛虫だった。小さな黒い毛虫が、礼来の指から落ち、机の上でひっくり返り、くねくねと動いていた。

「わあ、毛虫！」

周りの子が叫び、教室は大騒ぎとなった。

騒ぐみんなの視線は机の上の毛虫ではなく、立っている礼来に向けられていた。授業が始まった時から礼来が感じていた視線だ。礼来は顔が急に熱くなるのを感じた。

「静かに！」

美子先生が教壇をおりて、教室の後ろから箒とちりとりを持ってきた。そして、礼来の机に向かって、箒を振り上げた。

「ノオウ！」

「やめて！」

教室にソジンと田島さんの大きな声が同時に響いた。ソジンの英語と学級委員の田島さんの言葉に、みんなの騒ぎは一瞬静まった。美子先生の手も止まった。

そこへ美子先生を押しつけ、トイレから戻って来た果歩が飛び出してきた。果歩は礼来

の机まで来ると、小さな毛虫を手でつまみ上げ、顔を近づけた。

「毛虫、すごくきれい」

果歩の言葉に、固まっていたクラスの雰囲気緩和が和らいだ。

「アホか」

男の子のいつもの言葉に笑いも起こった。

果歩は首を少しかしげ、にこにこ笑いながら礼来を見ていた。

——毛虫が偶然机にいるわけではない。誰かが毛深いことをからかうために置いたのだ。それをクラス全員が知っていた。

そう思うと、礼来は耐えられなかった。とにかく、その場から逃げ出したかった。

礼来は、立ち上って言いかけた言葉をつなげるように、

「先生……、頭が痛いので、早退させてください」と言って、道具をかばんに詰め込み、教室を飛び出した。

玄関で靴をはきかえていると、果歩が後を追いかけてきた。

「レーちゃん、頭痛いの？」

心配して果歩は、礼来の額に手を伸ばした。

「触らないでよ」

毛虫に触った手が嫌で、礼来は振り払おうとしたが、すでに果歩は手を引いていた。

礼来は言葉通りに頭痛を心配する果歩に無性に腹が立っていた。

「あんたはアホか」

そう吐き捨てて、礼来は玄関を飛び出した。

「ごめんな、アホで」

果歩の寂しげな声は聞こえていたが、礼来は振り返ることなく校庭を走り、校門を駆け抜けた。

ちょうど大きな通りの信号は青だった。礼来はとにかく学校から離れたくて、横断歩道を一気に走って渡った。

大通りを渡り切ると、そこには中国人の老夫婦が営む中華料理店「来来」があった。いつもの赤い暖簾はかかっておらず、入口に「暫く休みます」と書かれた紙が貼られていた。

隣の古くからあるロシア料理店も閉まっていて、戦争反対のビラやペンキの落書きで埋めつくされていた。店の前には空のペットボトルや缶も投げ捨てられていた。

「なんも関係ないし、悪くないのに、ひでえことしてさ。みんな脛に傷もつよ者だべさ」炭焼肉と書いた幟の横で、鉢巻き姿のおじさんが炭に火を起こし呟いていた。

「中国人」「ラーメン屋」とからかわれ泣いて帰った礼来をお母さんは店に連れて来て、「礼来は礼来なのよ」と言って、テーブルいっぱい料理を注文し食べさせてくれた。

それ以来、礼来は、「私は礼来。来来の中華は本当においしいよ」と笑顔で言い返せるようになった。

——でも、あの時とは違う。

礼来はガラスに映る自分を見つめ、大きく首を横に振ると、アパートに向かい全力で走った。

「机に毛虫を置くんなんてひどい」

美子先生が誰かを連れて謝りに来たら、礼来は言ってやろうと思った。ただ、問題は毛虫ではなく毛深さだ。

「お母さんが毛深い子に産んだから、私はいじめられるのよ」

お母さんが急いで帰って来たら、言ってやろうとも思った。でも、そんなことを言えば、お母さんが悲しむことは、礼来が一番よくわかっていた。

お母さんは倉庫で働いている。人が足りない時は、フォークリフトに乗ったりもする。作業着のまま買い物し、おしゃれも化粧もしない。ご飯だって礼来の残りで済ます。すべて礼来のためだ。そんなお母さんを悲しませることだけはしたくない。

あれこれ考えているうちに、いつもと同じ時間になっていた。結局、学校からは誰も来なかった。先生から連絡がいつているはずなのに、お母さんも早く仕事から帰って来ることはなかった。

お腹がすいた礼来は、お母さんを待ちきれず、棚にあった朝食用のパンを食べて、自分の部屋で次の日の準備をしていた。

——明日、どんな顔をして学校へ行けばいいのだろう。

礼来はざわついた心を抑え込み、いつもの夜に戻ろうとしていた。

そこへようやくお母さんが帰ってきた。

「礼来、ちよっと話があるの」

部屋を出て食卓に座りながら、礼来は連絡プリントがお母さんの手元にあるのを見た。お母さんは学校に行っていたのだと思った。

「今日、学校でドジンって呼ばれたの？」

お母さんが何を言っているのか、礼来にはわからなかった。

「ドジンって何？」

「土着の人という意味の土人。昔、アイヌの人がそう呼ばれていた。その土人って、ドッジボールの時、呼ばれたんじゃないの」

——呼ばれたのは毛虫。

そう思う礼来の耳の奥に、グラウンドでの声援がよみがえっていた。

「ソジン」「ソジン」とソジンの名が妙に多く聞こえていた。

「狙え、ドジン」

「やっつける、ドジン」

確かに「ソジン」に混じり、「ドジン」と聞こえていた気もする。「カホ」の時の「アホ」と同じやり方なら十分あり得ることだ。

「あなたが以前、中国人って言われたのと同じ。何の意味も考えず、土人とかアイヌって言い始めたの」

「でも、それなら私は土人じゃないって、はっきり言えばいいのよね」

土人なんて言葉、今どき使う人はいない。土人であれば、いくら礼来でも違うと言える。ただ、背中を押してほしかった。しかし、お母さんから言葉はなかった。

「礼来は礼来。私がそう言えばいいのよね。ねっ、お母さん、そうなんでしょう」

お母さんの顔を見ながら、礼来は校外学習で行った文化交流センターでのことを思い出していた。アイヌの人がサケの皮で作った靴を果歩が近くで見たいということで、礼来は一緒に展示の前の方にいた。

その後ろで男の子の声が聞こえていた。

「アイヌって毛深くない？」

「毛むくじゃらで熊みたいだ」

環境問題の課題で熊を調べようとして途中でやめたのは、その時の言葉が心に引っかかっていたからだ。礼来が発表すれば、熊の出没のニュースの度に、毛深さを言われる。ソジンのミサイルと同じだ。

毛深い、毛虫、熊、アイヌ、土人……、礼来の頭の中をいろいろな言葉が駆け巡っていた。そして、一つの考えに行き着いた。

「土人って……、ひょっとして、私はアイヌだから毛深いつてことなの？」

尋ねる礼来の目に、お母さんがゆっくりと頷くのが見えた。

「ごめんね。長い間、話をしないで。あなたのお父さんはアイヌにルーツをもつ人なの」

「それって本当のこと？」

礼来は信じられなかった。本や観光地で見えるアイヌという言葉が、自分と関わっているなど今まで一度も考えたことがなかった。

「お父さんが結婚しようと言ってくれた時、とてもうれしかった。でも、私は家族に説明する自信がなく、彼に『アイヌのことなんて、黙っていれば、わからないから』と言ってしまった。それは彼とそのルーツを否定するひどい言葉だった。私は北海道に生まれたのに、アイヌのことを何も知らないで、もう差別なんてないと勝手に思っていた。知らないことが差別であることに気づきもしなかった」

お母さんの目から涙があふれていた。礼来はお母さんが誰かの前で泣くのを初めて見た。「それからうまくいかず、結婚の話もなくなった。別れた後、あなたがお腹にいることに気づいた。お父さんは何も知らないの。家族から大反対されたわ。でも、今度はあなたが生まれる前から差別されているようで悔しくて……、私は一人であなを産み、育てたの」毛虫と言われ、女の子として毛深いことを気にしていただけなのに、父親がいて、自分にはアイヌの血が流れている。礼来は、ただただ混乱していた。

「美子先生は最初、毛虫のいたずらだと思っていた。でも、学級委員の田島さんに差別と言われ気づいた。今は昔と違い、差別のない共生社会の教育も進んでいる。でも、それが言葉だけのものになり、逆に子どもたちの中に、昔とも違う興味本位の差別を広げてしまったのかもしれないと、先生は謝っていたわ」

お母さんの説明など礼来の耳には届いていなかった。

「みんなは知っているの？」

「みんなは知らない。知らないで言っているからこそアイヌの人を傷つける。お互い知ることが大切なの。ただ、その過程で、あなたはもつと傷つくかもしれない。それでも、あなたは世界でたった一人の礼来。自分のルーツには誇りをもって生きてほしいの」

——そんなこと急に言われても、と礼来は思っていた。

そして、つい本音が口をついて出てしまった。

「どうしたら、毛深いことに誇りがもてるというの。他の子はみんな腕も足もつるつるじゃない。それに、違うところにも毛が生えてくる……」

礼来は、お母さんの顔をまともに見ることができなかった。

「これからあなたも大人になっていく。だから話したの。人は顔も違うし、肌の色や髪の毛も、考え方だって違うわ。あなたが生きていく世界では、お互いの違いを認め合って、自分らしく生きていくことが大切なのよ」

お母さんに言っただけでほしいのは、そういうことではなかった。礼来はもう自分を抑えることができなかった。

「お母さんは結局アイヌじゃないんでしょう。毛深くもないし、人から毛虫と言われたこともない。私の気もちなんてわかるわけない。私は一生誰からも好きになってももらえないかもしれないのよ。それもこれも全部、お母さんが私を毛深い子に産んだからじゃない。私なんて生まれてこなければよかったのよ」

絶対に言っただけでいい言葉だった。

礼来はその場にいたたまれず、自分の部屋に戻った。そして、ベッド代わりにしている押入れの布団に潜り込んだ。

「果歩ちゃんが迎えにきたわよ」

お母さんのひどく嘎れた声で目覚めた礼来は、そのまま眠っていたことに気づいた。

「頭が痛いから、今日は休む」

礼来は布団から出ることなく、お母さんに嘘を言った。そんなことは初めてだった。

お母さんは何も聞かず、学校には連絡しておくからと言って仕事に出かけた。テーブルの上には朝食のパンと果歩のママが働いている工場のシュークリームがたくさん置かれていた。冷蔵庫には、昼食用のおにぎりと礼来の好きな卵焼きも入っていた。

次の日も、礼来は学校を休んだ。続けて休めば、行きづらくなるのはわかっていた。でも、身体が動かなかった。お母さんと美子先生も話をしているはずなのに、学校に行きなさいとは一言も言わなかった。

翌朝、三日目の朝だった。

「おはよう」

果歩が明るい声で礼来の部屋にまでずかずかと入ってきた。小さい頃から一緒に遊んでいたので、果歩にとっては自分の家のようなものだった。礼来は押入れの襖も閉め、布団を頭からかぶった。

「レーちゃん、うさぎは心配なく。田島さんが手伝ってくれてるからな。それから、私はこっちの飼育係にもなったんだ。よろしくな」

果歩は机に何かを置いて学校に行った。

起きてみると、青色の蓋がついた透明のケースがあり、中には人參の葉が入っていた。

そこで何かが動いていた。それは、あの時礼来の手についていた黒い毛虫だった。

ケースの横にはノートが置いてあった。

「気づいてあげられず、ごめんなさい」と書かれた黄色い付箋があり、中を開くと、連絡と勉強の進み具合が丁寧に書かれていた。すべて美子先生の字だった。

それから毎朝、果歩はノートを持ってきては毛虫の世話をした。

ノートを見ると、美子先生が通常の授業以外に、毎日少しずつ北海道の歴史をみんなに教えていることがわかった。百数十年の間に、もともと住んでいた人、夢をもって来た人、逃げてきた人、連れて来られた人、様々な人たちの話を歴史として紹介していた。

「みんな脛に傷もつよそ者だべさ」と言ったおじさんの顔が思い浮かんだ。

果歩は学校のない土曜も日曜も関係なくやって来た。果歩が来ている間、礼来は押入れにこもり、顔を見せなかった。

「レエラア、元気だった？」

果歩は毛虫を勝手にレラと名づけ、舌足らずな発音で話しかけては世話をした。

「持って帰ってよ」

礼来は押入れの中から言った。

「レーちゃん、昔から生き物を家で飼いたいって言ってたじゃない」

「それは犬とか猫の話よ。毛虫なんて気もち悪い」

「そうかなあ、レエラアも生きてるのに……」

果歩が毛虫に向かい、ケースをコンコンと指でつつく音が聞こえていた。

「それに毛虫をレラなんて呼ばないでよ」

「上手く言えるように練習や。それに一番好きな名前だからな」

「アホか」

礼来はまた言ってしまった。

果歩のことだから、「アホちゃいまんねん」で返してくれると思った。しかし、果歩はいつものようにふざけることはなかった。

「ごめんな、果歩はアホで……」

それから、果歩は一言もしゃべらなかつた。

——果歩は泣いている。

礼来は布団の中で思った。自分をアホと言われて、平気な人などいるはずがない。クラスの子たちのことを言いながら、一番多くアホと言っていたのは礼来かもしれない。

果歩がいなくなった後、押入れから出て、ケースの中を見ると、小さな黒い毛虫は抜けがらとなっていた。そして、近くに黄緑色の大きな幼虫がもそもそと動いていた。

果歩はどこから借りてきたのか、一回り大きなガラスケースを持ってきて、中身をそっくり入れかえた。黄緑色の幼虫は、どっどん人參の葉を食べて、大きな糞をするようになった。頭には大きな目のようなものもついて何だか顔らしくなっていた。果歩は毎日ガラスケースを抱え、部屋から外に運んでは、掃除して葉や草を入れ変えた。果歩の呼びかける名前もいつの間にかレラに近づいていた。

やがて、大きくなった幼虫は白い糸を口からはき始めたかと思うと、知らない間に入っていた細い木の枝にぶら下がり、一つのかたまりとなって動きを止めた。その姿は押入れの中で布団にくるまる礼来のもう一つでもあった。

「それって、死んだの？」

礼来は布団から目だけを出して聞いた。

「レラはさなぎになって、力を蓄えてるんや」

果歩は動かなくなった白いかたまりをじっと見つめていた。

「なんで、わかるの？」

「ソジンが言った」

果歩によると、ソジンは虫や蝶が好きで、家には珍しい標本がいっぱいあり、持ってきた容器も育て方も全部ソジンから教わったとのことだった。

その話を聞いて、礼来はピンときた。

「ひょっとして、あの日の毛虫はソジンだったんじゃない？」と言いながら、布団を押しつけ、押入れから顔を出した。

「バレちゃった。やっぱり、私はアホや」

果歩はそう言いながらも、久しぶりの礼来の顔を見て、うれしそうに話し始めた。

ソジンは環境の課題として、農薬で虫や蝶が減っていることを調べていた。体育のあと、人参の葉に毛虫を見つけたソジンは、授業でみんなに見てもらおうと考えた。ちなみに、田島さんは百葉箱の温度を遡ってデータ化し、北海道の温暖化を調べていた。果歩もワンピースに着替えたのは、服の廃棄と再利用の話がしたかったのだと教えてくれた。ただ、美子先生のノートには、環境の授業の話はなかった。そのことを聞くと、それは礼来が戻ってきてからと先生が言っているらしかった。

果歩に話を続けさせた。

教室に毛虫を持ってきたソジンを見て、男子たちは机の回りでひやかし始めた。

「ソジン、毛虫が好きなのか？」

「ソジン、礼来のこと好きなのか？」

そのうちに毛虫は机から落ちて見えなくなってしまった。毛虫をみんなが探している間にチャイムが鳴って、そこへ礼来と果歩が走って戻ってきた。すぐに美子先生も入ってきて、みんな礼来の机のあたりで毛虫がいなくなったことを気にしながら、授業が始まったのだという。礼来にもようやく何が起こっていたのかがわかり始めてきた。

「ソジン、謝ってたよ」

果歩は、礼来が帰った後の話も続けた。

果歩の話はあちこち飛んだが、要約すると、だいたい次のようになる。

礼来が出て行った後、ソジンは、礼来を傷つけてしまったと机で頭を抱えていた。みんなも毛虫を教室に持ち込んだソジンを責め、責任を逃れようとしていた。みんなも、田島さんが話し始めた。

「違うでしょう。悪いのはソジン君じゃない。いじめよりひどい差別よ。ドッジボールの時も教室でも……」

その言葉をかき消すように、男の子たちは、

「教室では何も言ってない」

「ドッジボールはソジンを応援してただけだ」

「差別なんてしていないし、田島さんに関係ないだろう」と次々と大きな声を出した。

集中砲火を浴び、話を封じられた田島さんが、それでも話を続けようとした時、

「わかりました」と美子先生が声を上げた。

先生は教壇まで歩いて行くと、悪いのは先生だとみんなに謝った。

そして、黒板に「美子」と名前を書いた。

先生は、その名前と見た目の違いから、小学校時代、「美人の美子ちゃん」と容姿をか
らかわれ、いじめられた。そんな思いはさせたくないと小学校の先生になったのに、ドッ
ジボールの時も、教室でも何も気づかずにおいた。死にたいぐらい情けなく悲しい。でも、
親からつけてもらった美子の名に恥じぬよう美しくありたい。だから、もう一度やり直さ
せてほしいとみんなに言ったらしい。

「先生は怒らなかつたの？」と礼来が聞くと、

「うん」と果歩は嬉しそうに返事して、「それからアホと言われなくなった」とつけ加えた。

「嘘でしょう」

礼来には、そんな話をしたぐらいで、あの男子たちが変わるとはとても思えなかつた。

すると、果歩は急に自分のかばんの中を探し、メモ帳を取り出した。忘れ物や遅刻をし
ないようにママがいつも持たせているものだ。

「後で教えてもらいながら、劇のセリフみたいに書いたんだ。じゃあ、行くよ、感動の名
場面や」

果歩は、細かい字でびっしり書かれたメモを見ながら、先生が話し終えた後の教室を再
現し始めた。

椅子に座り姿勢を正した果歩は、真っ直ぐに手を上げた。

「先生、人はどうしたら美しく生きられるのですか？」

その話し方は田島さんだった。

それから、果歩は立ち上がって、教壇に立つ美子先生に成り切った。

「人は弱いから自分を守ろうとして、弱いものを見つけ攻撃する。それが大きくなれば戦
争にもなる。だから、みんなには自分の弱さに逃げないでほしい。人は生まれながらに価
値がある。それを自分自身が信じるの。難しく、勇気のいることかもしれない。でも、そ
れができれば、自分に自信がもてる。自信さえもてれば、自分だけでなく、生きているも
のすべての価値を認めることのできる強く美しい人になれるわ」

果歩が演じた美子先生は静かに微笑んでいた。

果歩は椅子に座ると、また田島さんとなって背筋を伸ばし、少し間をおいてから、立ち
上がって話を始めた。

「礼来さんに、ひどい言葉をかける人やそれを黙って見ている人を私は許せませんでした。

でも、恥ずかしくて本当のことを言えなかった私もみんなと同じなのです。礼来さんは『中国人』『ラーメン屋』って言われましたが、『来来はおいしいお店よ』と言い返してくれました。その言葉に私はずっと救われてきました。私も自分に自信をもち、強く美しい人になりたい。だから勇気を出して言います。来来をやっている中国人は、私のおじいちゃんとおばあちゃんなんです。今まで黙ってきて、ごめんなさい」

田島さんが乗り移ったかのような演技で、果歩は辛く苦しい告白を話し終えた。

その事実は、礼来にとっても衝撃だった。おそらく、礼来を通して田島さんとその家族を侮辱し続けてきた子たちの心にも、きっと深く重く響いたに違いない。

「どう、似てる？ 女優になれる？」

相当練習したのだろう。台詞も何度も書き直したのだろう。

自慢げに少し胸を反らせた果歩は、壁にかかる時計を見て驚いた。

「やばいつ、長居しすぎた。遅刻や」

果歩は慌てて部屋を飛び出して行った。

あとには、美子先生のノートが残されていた。礼来は教科書を出して、ノートと照らし合わせてみた。

——みんな進んでいるんだ。

ガラスケースの中で動こうとしないさなぎを見ながら礼来は思った。

「動いた。レーちゃん、始まるよ」

幼虫がさなぎとなってしばらくしたある日、果歩はかばんも持たず、いつもより早い時間に戻ってきた。

眠い目をこすり、押入れの寝床から出て、机の上のガラスケースを見ると、これまで全く動きのなかったさなぎの頭の部分がゆっくり動き始めていた。

さなぎの頭の方から、殻が破れ、二本の丸まった触角と真黒い艶々した目が出てくるのが見えた。

「何、これ！」

礼来はパジャマ姿で果歩の横に立ち、ガラスケースの中を見つめた。外に出てきた目の下に、細い前足らしいものが見え、そこに力を込め、何かが殻から這い出ようとしていた。

「頑張れ！」

果歩は小さな手を強く握り締めていた。

やがて、黒く濡れた一つのかたまりが、殻を抜け出してきた。黒いかたまりは静かに立ち上がり、ゆっくりと大きく膨らんでいった。そして、二本の触角を長く伸ばした胴体を中心に、黒と黄色の美しい模様が左右に大きく別れた。それはアゲハ蝶の羽だった。

「きれい！」

礼来は思わず声を上げた。

「ビューティフルや」

果歩は、ガラスにしがみついて、その美しい羽を見ていた。

アゲハ蝶は、羽をゆっくりと開き、静かにばたつかせ始めた。羽の付け根の長い毛が静かに揺れていた。濡れていた羽も乾き、金の粉をふいたように輝き始めた。見たことのない美しさだった。

「でも、もうお別れや」

果歩は礼来の部屋の窓を開けた。朝の冷気が部屋に入ってきた。時計を見ると、学校へ行く時間が近づいていた。果歩はガラスケースの蓋を静かにはずし、礼来の方を見た。

礼来はケースに手を入れ、アゲハ蝶をつかみ、手の上に乗せた。少しの間、アゲハ蝶は羽を広げたり閉じたりしていた。学校で手から払い落した毛虫が、今は礼来の指の上で宝石のように輝いていた。

「あっ！」

アゲハ蝶は、ふわりと飛び上がり、羽ばたきをしながら、窓の外に飛び出して行った。

空高く舞い上がって行くアゲハ蝶を二人は、しばらく何も言わず目で追っていた。雲一つない青空だった。

「ねえ、学校に連れていってくれる」

空を見上げながら礼来が言った。

遠ざかって行くアゲハ蝶を見ながら果歩が頷いた。

「用意してくるね、礼来」

果歩は恥ずかしそうに言って、礼来の部屋を飛び出して行った。

「果歩ちゃんママが縫ったのよ」

美子先生のノートを見ながら、学校へ行く準備をしていた礼来に、お母さんが洋服を手渡してくれた。

服を体に当ててみた。麻の生地で作られた黒と黄色のワンピースで、それは今飛び立ったアゲハ蝶の模様にも見えた。袖は手元で広がり、内側にはスリットも入っていた。スカートは足首近くまで広がっていた。手足の出る部分はほとんどないのに、涼し気なワンピースとなっていた。

「果歩ちゃんが、あなたのためにって、ママに頼んだのよ」

果歩は、礼来が毛深いことで悩んでいたのを知っていたのだ。毛虫と言われていたことも知っていて、あの毛虫が成長し、美しいアゲハ蝶になるのを見せたのだ。

——一番のアホは私だ、と礼来は思った。

「お母さん、ごめん。もう、大丈夫だから」

礼来が言うと、お母さんは特徴的な刺繍のある黒い布を両手で差し出した。

「お父さんがあなたにとって……。マタンプシといって、お父さんのおばあちゃんがつけていたものらしいわ。そのワンピースにとっても似合っている」

その布はアイヌの女性が儀式などで頭につけるものだ。礼来は昼間、お母さんがダンボールに入れていたアイヌ関係の本を読んで勉強していた。

「お父さんに会ったの？」

「お父さんだけでなく、お父さんの家族やうちの家族にも会って話をしてきた。私も変わらなくちゃね。意地をはっていたのは私だけ。みんなあなたに会いたがっていたわ」

「私、お父さんに会えるの？」

「今度会いに行きましょう。お父さんは獣医さん。野生の動物たちも診るのよ」

その仕事は、礼来の夢でもあった。

「お母さん、私のレラって名前、アイヌ語なんでしょう？」

「そうよ、レラはアイヌ語で風。自然界のすべてのものとダンスできる存在。風は人間が作った境界や壁を超えて、すべての人に吹き渡ることができる。そんな風のような人になってほしくて、あなたにつけたのよ」

「わかった」

これからは人に聞かれても、読み方だけでなく、意味も伝えられると礼来は思った。そして、何よりも生きて行く意味が初めてわかった気がした。

「さあ、あなたも食べて大きくならなくちゃ。昼ごはん分も食べなさい」

「うん」

お母さんの作ってくれた卵焼きの甘さが口一杯に広がっていくのを礼来は感じていた。

久しぶりの太陽は眩しかった。日差しはもう夏になろうとしていた。

「おはよう、礼来」

迎えに来た果歩は、あの日と同じ白地に黒の水玉のワンピースに着替えていた。

「おはよう、果歩」

礼来も果歩のママが縫ってくれたワンピースを着ていた。お母さんから渡されたマタンプシもお守り代わりに腰に巻いていた。

「やっぱり黒が似合う」

果歩はワンピースを着た礼来を上から下まで眺めて言った。

「ありがとう」

礼来は、その言葉を随分長い間、口にしていなかったと思った。

「うちなあ、一人一人に似合う服を仕立てる街の洋服屋さんになるのが夢なんや」

「へえ、果歩は芸人さんになりたいとばかり思ってた」

「パパさんに話したら、いつの間にか警備会社の正社員になってた。洋服屋開いたら、警備がいるだろうって、意味わかんない」

「それはね、パパさんの照れ隠しだよ」と礼来は言おうとしたが、果歩は笑いながら、もう駆け出していた。

先に行く果歩は、踏み出せずにいる礼来の方を向いて、両手を大きく広げてぐるりと回ってみせた。

「果歩はモンシロ蝶で、礼来はアゲハ蝶。さあ、飛んで行くよ！」

「うん！」

礼来は果歩を追いかけて走った。

ワンピースの中を朝の冷たい空気が通り抜けていった。それは礼来が初めて感じる心地良さだった。

学校へはあつという間に着いた。

校門の前には先生方や生徒が立ち、登校してくる子に声をかけていた。

「おはよう、礼来さん」

美子先生はあの日と同じジャージを着ていた。迷惑をかけたことを謝ろうとすると、

「あれっ、先生、着替えたの？」と果歩が割り込んできた。

「なんで果歩が知ってるの？」

朝早くから一緒にいた礼来としては不思議だった。

「だって、先生、毎朝ノート持って来るから」

答える果歩の方が不思議という顔をしていた。言われてみれば、その通りで、先生は授業がすべて終わってからノートを書いて、毎朝果歩に渡していたのだろう。

「先生は、外でガラスケースを掃除するのも手伝ってくれたよ」

果歩がそう言うと、先生は人差し指を果歩の口の前に立てた。

「先生……」

礼来は感謝の思いで胸がいっぱいだった。

「どうしたの？」

美子先生は礼来の顔を覗き込んだ。

その顔を見て、礼来は学校に着いたら最初に言おうと考えていたことを思い出した。

「先生、環境の課題、私は『熊との共生』にします」

礼来の言葉に、先生の顔は輝きを増した。

「そう、これでようやくあの日に戻れそうね」美子先生はジャージの襟を立てて見せた。

「先生、ビューティフル！」

果歩は美子先生に親指を立てていた。

その様子を見て、学級委員の田島さんが近づいてきた。

「礼来さん、おはよう」

礼来が頭を下げると、田島さんは道路の向こう側を指差した。來來の暖簾を立てかけられ、入口の前を掃除している人がいた。

「おじいちゃんとおばあちゃん、店をやめようとしていたんだけど、私が大きくなるまで頑張るって。掃除しているのが私のお母さん。私も一緒にお店手伝うの。だから、また食べに来てね。來來はおいしいから……」

道路の向こうの女の人は礼来たちを見て頭を下げた。そして、隣の店の前も掃除し始めた。鉢巻をしたおじさんがバケツを持ち、落書きを消していた。

「ビューティフルや！」

果歩はまた親指を立てていた。

「そのビューティフルって何なの？」

礼来が聞くと、

「世界にビューティフルを一つずつ増やして行こうって、美子組全員で約束したんだ」

果歩はそう言っって校内に入っって行っった。

「果歩ちゃんが一番ビューティフル。果歩ちゃん、朝から連絡網で電話やメールして、礼来さんが登校して来るからよろしくって、みんなにお願いしてたのよ」

田島さんは果歩の後ろ姿を目で追っていた。

——果歩のアホ。

言葉を飲み込んだ礼来の胸元は熱かった。

「それ、素敵ね」

田島さんは礼来の腰のあたりを見ていた。

「今度その刺繍、私にも教えてくれる」

「私も勉強して、いつかみんなに自信をもって説明できる人間になりたいと思っっている」
そう言っって、礼来は腰のマトンプ☑をほどき、髪を止めるように頭に縛りつけた。

「ビューティフル！」

親指を立てる田島さんの笑顔は以前よりも美しかった。礼来も美しくなりたいと心から思っった。そして、この世界に一つでも多くビューティフルを増やしたいと思っった。

礼来は先に行く果歩を追っって久しぶりの学校に入っった。校庭の花壇の前に男の子が見えった。男の子は走っってくる礼来に気づき、立ち上がっって、両手を顔の前で合わせ頭を下げた。

ソジンの名で土人と呼ばれた日が、礼来には遠い昔に感じられた。

「どうしたの礼来、ソジンのこと忘れたの」

果歩が振り返って言った。

「アホか。ソジンを忘れるわけじゃないでしょう」

反射的に出た礼来の「アホ」に合わせ、果歩はワンピースの裾を翻し、その場でぐるりと体を回した。そして、片足をくの字に上げて、

「アホちゃいまんねん、パーでんねん」と両手を大きく開いた。

礼来も果歩のまねをしてみたくなった。

体をぐるりと回すと、ワンピースの長い裾が風に広がった。そんな感覚は初めてで、お姫様になったような気分だった。でも、力の加減がわからず、勢いよく回りすぎて後ろを向いてしまった。

「すごい、一回転半ひねりや」

果歩は、ぐらつく礼来の両肩を押さえ、すぐに、「あつ、ごめん」とその手を離した。

「なんで謝るの?」

礼来は果歩を背にしたまま聞いた。

「さわったら、アホがうつるって」

ドッジボールの時も果歩は手を引つ込めた。礼来の額に手をかざそうとした時も手を止めた。確かに、コロナの時代に感染と関連づけ、よくそんなことが言われていた。体育の授業でグラウンドに向かう時も、「アホがうつるから近くに寄るな」という声が聞こえていた。しかし、そんなことありえない。言っている人間すら信じてはいない。それでも果歩は言葉通りに信じ、礼来にアホをうつしてはいけなはずと気をつけていたのだ。

——果歩のアホ。

礼来は目頭が熱くなるのを感じた。

「あんたはアホか。アホがうつるわけない」

礼来が背を向けたまま言うと、

「よかった。アホはうつらないんだ」

果歩はいつものように言葉通りに意味をとった。

「違うよ、果歩。あんたはアホじゃない。パーでもない」

礼来は泣いている顔を見られないように、思い切り口をひねり、変顔をつくった。

そして、振り向いて言った。

「アホちゃいまんねん、果歩でんねん」

果歩のパパさんはアホと言われたら、こう言い返せと教えたのだと思った。

変顔に驚き、笑わない果歩を見て、礼来はポーズを忘れていたことに気づき、片足をく

の字に上げ、両手を開いてもう一度言った。

「もう一つおまけに、毛虫ちゃいまんねん、礼来でんねん」

——そうだ、誰に何を言われようと、私は礼来なのだ。

かかしてみたいな格好で倒れそうになった礼来を見て、果歩はようやく笑った。

果歩のいつもの笑顔を見て、礼来も笑った。

笑う二人は、風を感じた。

「あっ！」

視線の先に、羽をゆっくり広げながら飛ぶ一匹のアゲハ蝶がいた。二人は昇り始めた太陽の眩しさに手をかざしながら、アゲハ蝶が空高く舞い上がって行くのをしばらく一緒に見ていた。空はどこまでも広がった。

「行こうか」

礼来は両袖を肘まで上げ、校庭を走り出した。その後には果歩が続いた。久しぶりに登校してきた礼来を同級生の子たちが見ていた。

礼来は追いかけてくる果歩に手を伸ばした。果歩の小さく柔らかな手が触れた。礼来はその手を離すまいとしっかりと握った。

「さあ、飛ぶよ！」

手をつないだ二人は、地面を強く蹴り、初夏の青い空高く舞い上がった。